

P2-13-5 原発性卵管癌 11 例の臨床病理学的検討

順天堂大練馬病院¹, 順天堂大²今井 幸¹, 池本裕子¹, 崎尾昇子¹, 矢田昌太郎¹, 氏平崇文¹, 太田剛志¹, 長野宏史¹, 萩島大貴¹, 須賀 新², 寺尾泰久², 加藤聖子², 竹田 省²

【目的】卵管癌は婦人科悪性腫瘍の 0.3% を占め、稀な疾患である。我々が経験した 11 症例について臨床病理学的な検討を行った。【方法】1997 年から 2011 年の 5 年間で原発性卵管癌と診断し、治療した 11 症例を対象とした。【成績】平均年齢は 63 才 (47~76 才)。主訴は不正性器出血 4 例、下腹部痛 2 例、水様性帯下 1 例、内膜細胞診異常 2 例、他疾患のフォローで指摘されたのが 2 例。術前の画像検査で卵管癌と読影されたものは 1 例のみであった。全例に手術を行っており、術式は子宮全摘出術 (TAH)、両付属器摘出術 (BSO)、大網切除術 (OM)、骨盤内リンパ節郭清 (PL)、傍大動脈リンパ節郭清 (PAN) 施行が 3 例、TAH、BSO、OM、PL 施行が 2 例、TAH、BSO、OM 施行が 4 例、TAH、BSO 施行が 2 例であった。術後進行期は、Ia 期 2 例、Ic 期 1 例、IIb 期 1 例、IIc 期 1 例、IIa 期 1 例、IIc 期 1 例、IV 期 4 例であった。組織型は、漿液性腺癌 6 例、漿液性腺癌で肉腫変化を伴うもの 1 例、類内膜腺癌 2 例、漿液性腺癌と類内膜性腺癌の混合型 1 例、癌肉腫 1 例であった。胸水貯留の IV 期 2 例に対し術前化学療法を施行。化学療法はタキサン系と白金製剤を使用。予後は NED 7 例 (I 期 2 例、II 期 2 例、III 期 1 例、IV 期 2 例)、AWD 1 例 (III 期 1 例) であり再発は 3 例 (III 期 2 例、IV 期 1 例) 認めた。再発までの期間は 5~11 カ月で、全て腫瘍マーカーの上昇と PET-CT 施行し異常集積を認めることで確認された。【結論】卵管癌は化学療法が効果的であり、卵巣癌に準じた治療法が行われている。また診断は困難であり、III 期以上の進行期で発見されることが多い。

P2-13-6 当院における上皮性卵巣癌症例の検討

群馬大

村田知美, 中村和人, 青木 宏, 池田慎智, 木暮圭子, 中尾光資郎, 西村俊夫, 金井眞理, 峯岸 敬

【目的】当院で治療をした上皮性卵巣癌症例について臨床的に検討した。【方法】1993 年~2009 年までに当院で治療を受けた上皮性卵巣癌 195 症例 (漿液性卵巣癌 68 例・類内膜腺癌 45 例・明細胞腺癌 55 例・粘液性腺癌 27 例) を対象に、進行期 1 期の staging laparotomy 施行の有無の検討、optimal disease 症例の検討、化学療法別の累計 5 年生存率を検討した。【結果】進行期 1 期のうち、staging laparotomy 施行例 68 例と施行しなかった 18 例の累計 5 年生存率は、施行例 92% vs 無し例 75% であった。また、pT1 期の 68 例の内、3 例 (4.2%) にリンパ節転移を認めた。1999 年~2009 年までの進行期 3c 期の 69 例、腹腔内播種残存例 48 例・播種残存+リンパ節生検によるリンパ節転移を確認できた例 15 例・suboptimal surgery+リンパ節転移例 10 例・腹腔内病変は無くリンパ節転移陽性のみ例 6 例では、累計 5 年生存率はそれぞれ 20%・29%・35%・41% であった。化学療法別の検討では、初回化学療法がタキサン系 (TC) 療法であった症例とそれ以前の CAP 療法症例を比較したところ、累計 5 年生存率では、進行期 1 期+2 期 TC 療法と同進行期 CAP 療法では 84% と 69%、進行期 3 期+4 期 TC 療法と同進行期 CAP 療法では 29% と 18% であった。【結論】当院の上皮性卵巣癌の治療経過を検討したところ、staging laparotomy 施行・optimal surgery 施行の可否は正確な進行期の判断・予後の予測という点において 1 個人の患者と関わるうえで重要であると考えられた。また、化学療法の変遷により早期癌 (1 期+2 期) については TC 療法が優位思われるが、進行癌 (3 期+4 期) については長期的な予後では有意差はないと思われた。

P2-13-7 当科における進行上皮性卵巣癌の長期生存例の検討

岐阜大

牧野 弘, 川島英理子, 市橋享子, 上田陽子, 伊藤直樹, 森重健一郎

【目的】進行上皮性卵巣癌は手術と化学療法により、いったん寛解を得られることが多いが、その後再発をきたすことも多く、長期生存は依然困難である。そこで今回我々は進行上皮性卵巣癌の長期生存例を抽出し、その因子を明らかにするため臨床的検討をおこなった。【方法】1998 年 1 月から 2006 年 8 月までに当科で治療をおこなった上皮性卵巣癌 III 期、IV 期 72 例について検討した。【成績】1998 年 1 月から 2006 年 8 月までに当科で治療をおこなった上皮性卵巣癌 III、IV 期は 72 例であった。その内訳は漿液性腺癌 49 例 (68%)、粘液性腺癌 6 例 (8%)、明細胞腺癌 5 例 (7%)、類内膜腺癌 9 例 (13%)、リンパ節転移を認めたものは 24 例 (33%)、残存腫瘍が 1 センチ以下の optimal debulking surgery が行われたのは 36 例 (50%) であった。そのうち非担癌で 5 年以上の生存を認めたのは 8 例 (11%) であった。いずれも術前化学療法は行われておらず、5 例 (63%) においてリンパ節転移をみとめた。病理組織型は漿液性腺癌が 7 例 (88%)、類内膜腺癌が 1 例 (14%) であった。全症例で optimal debulking surgery が行われ、3 例において完全摘出され、術後補助化学療法をおこない長期寛解を得ている。のこり 5 例において残存腫瘍は 1 センチ以下であったが、そのうち 4 例において術後寛解導入療法をおこない、残り 1 例は術後化学療法なしで長期寛解を得ている。【結論】進行卵巣癌において、組織型と残存腫瘍が長期生存に影響していると考えられる一方、リンパ節転移の有無は影響しないと考えられた。